

埋蔵金にまつわる話は各地に存し、また一攫千金を狙った山師達が活躍する話も尽きない。地下に眠る金は壮大なるロマンではあるが、人生を掛けるには余りにもリスクが大きい。さて、北海道でも砂金がかなり産出している。今でも“日本一の清流”の名を恣にする大樹町の歴舟川では7月に砂金探訪会が開催されて、ロマンを求める人々が押し寄せる。欧州藤原氏の栄華の基となった砂金の一部は北海道産だったとの説もあるようだ。何処でどれ位産出したのかは、その性格上明確ではない。大樹町の砂金は1600年代には採取されていたとの記録もあると町のHPには記載されている。



（イトムカ鉱山発祥之地）

以下、前号からの続きである。

II 硫黄

地質・鉱山の基本調査が行われたので、その結果は利用されるようになったものの、官業による石炭採掘以外は、民間資本は、それほど投資されるには至っていなかった。然しながら、硫黄は一般に採掘が容易であったので、次第に盛んになっていた。本道のみならず千島方面にまで、拡張された。面白い事に硫黄山と名前が付けられている所は硫黄の産出した山である。

朔東管内では、跡佐登硫黄山(釧路国川上郡)(現：弟子屈町硫黄山)と知床硫黄山(斜里郡遠音別村)である。

- 跡佐登硫黄山；同鉱の発見は、不明だが、古い。慶応年間に松前藩吏が採掘したとも言われる。明治5年佐野孫右衛門が発見、9年に試掘を請願し許可を得た。その後所有権は、山田氏へ譲渡され、明治20年には、安田財閥の祖安田善次郎(名義人は、善之助)に、譲渡された。
- 知床硫黄山：明治初年船乗り渡世の皆月善六なる者が北見国沿岸を航海の際に硫黄を発見、明治9年に出願、10年試掘、11年5月開鉱した。精鉱の方法は、煮釜で生硫黄を煮詰めて溶解して、中央の汲釜に流し込み、浮泊物を汲み去り、溶湯をおよそ40斗入りの酒樽に汲み移すと言う方法である。生硫黄100貫目に付き精硫60貫となった。

石炭に次ぐ、北海道の主要鉱業の一つである硫黄は、第一次世界大戦の時代には全国60%を産出、函館から海外に輸出されて、日本における銅・石炭に次ぐ重要輸出鉱産品であった。

Ⅲ 水銀

● イトムカ(東洋一の水銀鉱山、偶然の産物)

昭和11年北海道を襲った大暴風雨は、大雪山の原生林に多大の損害をもたらしたが、偶然にもこの時風倒木の搬出作業者によって美しい真紅の重い石が発見された。この石が水銀であった。関西の実業家野村徳七の創業になる野村工業株式会社が、発見された地名イトムカ、伝説によればアイヌ語の「光り輝く水」の意に因んで「イトムカ鉱山」と名付け開発に着手したのは昭和13年春のことである。爾来30有余年イトムカ鉱山は、東洋一の水銀鉱山として世界にも知られわが国産業の発展に多大の貢献をした。当時、この地には、350余戸の社宅群を中心に、小中学校、病院、各官公署等がおかれ、その名も「大町」と呼ばれて栄えた。しかしながら、内外の経済事情からついに昭和48年鉱山はその使命を終えて閉山した。(碑文から引用：以下略)

Ⅳ 金山

金山は、明治31年、北見国紋別郡枝幸村幌別川流域での砂金発見で、ゴールドラッシュが起き、砂金にとりつかれた男達が大勢集まった。明治31年枝幸頓別川パンケナイでの砂金の発見が第一次オホーツクゴールドラッシュの口火を切り、明治37年頃のヤソシ金山で第二次のラッシュとなった。大正3年には天王鉱山、そして大正4年から5年に掛けて元山大露頭の発見に繋がり、鴻之舞7人衆の運営を経て住友に売却され、佐渡金山と並び全国のその名を馳せたのが鴻之舞金山である。同金山は、大正6年(1917)の開山、昭和48年(1973)資源枯渇により56年間の操業の幕を閉じた。

将来的に、紋別の鴻ノ舞金山に匹敵するかも知れぬ(?)と、関心を呼んでいる鉱山がある。

● 勢田鉱山(平成の金山：上士幌町NNW約8km)

当初は水銀鉱山として、事後は製紙用の良質なカオリンを採掘し、1980年代半ばからは、ゼオライトを採掘していたが、紋別の鴻ノ舞の地表面が良く似ているために、1991年からボーリング調査したところ、有望な金鉱床を発見して、「平成の金山」と騒がれた。

Ⅴ その他

管内の鉱山には、上述以外にも中小の鉱山が幾つかあるけれども割愛する。

(参考：北海道史 通説第2巻、第3巻、各種のHP等)